

interview インタビュー

9月15日の東弁先進会員感謝慰労の会で、司法マンガ「家裁の人」の原作者毛利甚八氏が「桑田判事は今、なにを思うか」とのテーマで講演した。この機会にインタビューをしたところ、話題は自然に司法制度改革に及んだ。

(聞き手：矢澤昌司，角田邦洋)

プロフィール もうり・じんぱち

1958年長崎県佐世保市生まれ。日大芸術学部卒。大学卒業後からフリーライターとしてルポやインタビューを手がける。「季刊刑事弁護」(現代人文社)に「事件の風土記」(文と写真)を連載中。漫画「家裁の人」(全15巻 小学館)の原作、ルポルタージュ「宮本常一を歩く」(上・下巻 小学館)、インタビュー集「裁判官のかたち」(現代人文社)など著作多数。

作家

毛利甚八さん

——毛利さんといえば、一世を風靡した司法マンガ「家裁の人」の原作を書かれたことが頭に浮かんでしまうのですが、まず「家裁の人」を書き始めたきっかけをお聞かせください。

私自身、今でも不思議なきっかけで「家裁の人」の原作を書き始めたと思っています。私は、当時よく新宿の飲み屋さんに行っていたのですが、ひょんなことで行きつけの飲み屋さんで、ある人と飲み仲間となり、2～3年くらいその人が何をしているのか知らずに仲良くさせてもらっていました。その人が実は雑誌の編集長をされていたのです。その人から植物の話と家裁の判事をテーマに作品を書いてみないかと言われました。飲んでいる最中の話だったので、私は半信半疑だったのですが、その話が具体化して、「家裁の人」を連載することになったのです。

——連載のきっかけが飲み友達の依頼というのは非常に面白い話ですね。当時、法曹界についてご興味を持たれていたのですか。また、連載をされている過程で苦労されたことはなかったでしょうか。

とにかく連載を開始する際に、テーマが植物の話と家

裁の判事と決まっていたから。そこで、最高裁判所に取材を申し込んでみたのですが、前例がないということで断られてしまいました(笑)。仕方なく、当時の少年法の条文を読んで、そこから家裁の判事をイメージして連載をしていました。連載が始まってから3年間は想像力を頼りに書いていました。連載が進むと、だんだん作品に対する反響が大きくなってきました。そういった中で法曹界の実務家の方々とお話をする機会が出てきて、非常によい勉強ができました。ただ、作品に対する反響が大きくなればなるほど、私の中で、現実の裁判官と作品中の裁判官にギャップがあるのではないか、一般の読者に誤解を与えるようなことはないのか、といった不安が頭の中に浮かんできまして、非常に苦労しました。ですから、主人公の桑田の発言なども、なるべく人間らしいものになるように工夫をしていました。

——この作品を通じて、多くの法曹界の実務家と意見交換等をされる機会があったと思いますが、毛利さんが法曹家に対して持たれたイメージなどはどういったものでしょうか。

私は、この作品を通じて、特に少年事件の問題を中心に、法曹家の方々と意見交換をしてきました。そのような活動の中で、法曹三者といわれる人たちがそれぞれに対して違ったイメージを持っています。裁判官の方は、思っていた以上に理知的で、ものごとの考え方が厳格な人が多い。分かりやすく言えば浮き世離れしているのですが、それでこそ裁判官という気がします。とても潔いという印象も持っています。私も裁判官にインタビューをする機会がありますが、裁判官の方はインタビュー記事に訂正を入れないですね。裁判官がメディアの書き方に介入すべきではない、という原則に忠実なのだと思います。弁護士の方は、正直分かりません。というのも、お会いする弁護士さんがすべて違った個性を持っておられて、私の中で弁護士という人種はどういった人たちなのかを整理できないからです。残念ながら、検察官の方とはあまりお付き合いがないので、イメージといったものは特にはありません。

——現在、司法改革が進み、多くの制度が改正されることになっていますが、こういった点についてご意見などはないでしょうか。

市民に開かれた司法制度を創ることには非常に賛成です。ただ、私の経験上では、法曹家の方々にもっと一般の人たちに対して、分かりやすく説明を行なうような工夫をして欲しいと思います。私が今まで接してきた法曹家の方々はみなさんとても頭のよい方たちばかりで、知識も非常に豊富な方々ばかりでした。そのためでしょうか、みなさんご自分の知識すべてを正確に伝えようとしている傾向があるように思います。もっと、例えなどを出して分かりやすく説明をして欲しいと思うことはあります。例えを出す過程で、細部で間違った部分があっても、一般の人たちに概ね正確なイメージが伝わるような説明をされてもよいのではないかと思います。特に、裁判員制度がスタートすると、一般の人たちに対する説明の仕方が非常に重要になってくると思います。

——それは、私も耳が痛いですね（笑）。そのほかには何かないでしょうか。

そうですね。私は、中央と地方の構造的な問題について興味を持っていますが、そういった問題を解決するのに法曹家の人たちにも協力してもらえたらと思うことがあります。私が感じているのは、今、地方に元気がないことです。ある意味で閉塞感が漂っていて、自分たち

の力だけではどうしようもない状況になっているように感じています。そこで、中央から活気に溢れた若手の弁護士さんなどが、地方にキャラバンなどに乗って行き、地元の人たちと触れ合って、いろいろな問題解決に積極的に関与し、意見交換をしてもらいたいと思います。そうすることで地方にも元気を分けて欲しいと思います。これは、私の提言なのですが、こういった制度を単に創ったのではなかなか参加してくれる弁護士さんがいないでしょうから、弁護士会の会長に立候補するための条件の1つとして、こういった活動に参加することを設けてみたらいかがでしょうか（笑）。

——面白いアイデアですね（笑）。しかし、いきなり弁護士がぞろぞろと押しかけて、地方の人たちは心を開いてくれるでしょうか。

もちろん、そういった活動に参加される弁護士さんの姿勢によると思います。やはり積極的に問題を解決するといった意識を持たれて、地方のコミュニティーの中に飛び込んでいかないと難しいかもしれません。しかし、地方でそういった刺激を求めているのは確かです。法曹家の方々には、そういった地方の要求を満たすだけの力が十分に備わっていると思います。

——やはり、どんな制度もその制度を動かす人間次第ということでしょうか。最後に、毛利さんのこれからの活動についても聞かせてください。

私は、期せずして「家裁の人」という作品を生み出し、連載終了後も「家裁の人」とは何だったのだろうと考え続けてきました。もう一度、少年司法の現状を視野に入れた上で、「家裁の人」とは違うタイプの作品を書こうと思っています。少年院や自立支援施設などの更正にかかわる話になるでしょうが、それがマンガになるのか、それとも小説のような形になるのか分かりません。できれば桑田判事よりもバイタリティのあるキャラクターを描いてみたいです。

（構成：角田 邦洋）



若い弁護士さんたちに、休みのリゾートを兼ねて地方にキャラバンで行って、地方の人たちが抱える問題解決に積極的に参加していただきたいですね。法曹家の人たちには、人に活力を与える力が備わっていると思います。